Interpreter Workshop vol.27

府民の森 パークレンジャー 2003

Interpreter Workshop Vol.27

目　次

パークレンジャー入門講座を終えて　奥田 浩司

「からすうりについて」　たけぴー

くろんど観察記　くまさん

樹 木 物 語　荒川 雅夫

アフリカのサバンナで出会った動物たち Vol.2　パクさん

おいしくアウトドア Vol.4　なかじぃ

ちはやイベント 雪と遊ぼう 報告　荒川 雅夫

この１年を振りかえって…　各レンジャー

編 集 後 記

《パークレンジャー入門講座を終えて》

１０期　奥田浩司

３月１３日（土）、１４日（日）の２日にわたる入門講座。ゼロの状態から手探りで始めた入門講座も終わってみれば、とても意義のあるものになったと思います。「パークレンジャーの停滞状況を何とか打開したい」という思いからスタートしたこの企画もその意味を見事に受けとめてくれた質の高い参加者にも恵まれ、結果的にはねらい以上のものがこの講座から導き出すことができたような気がします。２日間の流れと人間関係づくりには特に留意してプログラムを進めたのですが、とりわけくろんど園地での２日目は快晴という絶好の天候にも恵まれたこともあり、もうこうなれば僕は参加者たちの邪魔さえしなければ、うまくいったも同然です。プログラムの組み立てや所々に施した仕掛けも功を奏して参加者とスタッフが噛み合い、時間の経過とともにとてもいい雰囲気になりました。

僕はこの講座ではおしえるヒトをやったつもりはありませんし、参加者にもおしえてもらうヒトにはなって欲しくなかった。みんなが共に学び、共に育む講座にしたかった。受け身で主体的に関われない人をつくりたくなかった。僕はこの講座で影響を与えるヒトという役割を果たしたかった。講師ではなくコーディネーターという肩書きにしてもらったのは、その意味があったのですが、参加者たちは経験や年齢にかかわりなく、講座がもたせようとした空気を読み取ってくれた。まさにあの場にいた人が全員でつくりあげた、誰ひとりとして欠けていればできなかった講座だったのです。昨日まで顔も名前も知らなかったバラバラの生活を送っていた人たちが年齢や経験の違いを越えてつながった。最後に全員で円座になり２日間をふりかえり、わかちあう時間を持ったのですが、最初のアイスブレイクタイムにはレンジャーになろうという思いを持たずに参加した人までもが、「パークレンジャーになりたい」という言葉を発するまでにみんなの気持ちがつながっていたのです。下山時のみんなの笑顔がとても印象的でした。

ひとことで言えば、個的には本当に楽しい２日間でした。何の苦労もなしに、勝手に講座が楽しく進んでいったという感じです。参加者は異能揃いで、今までにいなかったタイプのレンジャー候補も多数参加、このメンバーがまるごとパークレンジャーになってくれればレンジャー活動の幅は大きく広がります。確実に活性化します。確実に風通しがよくなります。外からくだらない枠組で囲んでしまうようなことさえしなければ、確実にバラエティーに富んだイベントプログラムと新鮮なインタープリテーションが見られるようになります。個人的には新１２期生＝入門講座１期生だけで作ったプログラムに一参加者として参加したくらいです。在籍レンジャーの皆さん、共育関係からスタートした１２期＝入門講座１期生の絆は今までとは比べものにならないくらい強いですよ！しかも個性豊かで強力なメンバーが多いですよ！誰もが「世界でひとつだけの花」、ナンバーワンじゃないけど、オンリーワンです！

最後に忙しい中、駆けつけてくれたレンジャー仲間の荒川さん、中田さん、ありがとうございました。特にタイトなスケジュールの中、先の見えないこの講座に共感して積極的に関わって共に雰囲気づくりをしてくれたたけぴー、なかじぃ、くみちょー、フジさんには大感謝です。こんな素晴らしい仲間と一緒に１年間活動してこれたことを、本当に誇りに思います。ムーチャスグラシアス！メルシィーボウクゥー！ダンケシェーン！謝謝！（こんなこと恥ずかしくて、誌面上でしか言えないけど…）

「からすうりについて」

10期　たけぴー

昨年１０月にくろんど園地から交野ふれあいの里を歩いた時、道路端で「からすうり」がフェンスに絡み付いているのをみつけて小卵大の青い実（緑色）が沢山なっていたので４個をもぎ取って帰り、家において置きました。　腐ってしまうのかと思っていましたが、年末にはそれが見事に真っ赤（朱色）になりました。触ってみるとややざらざらで、表面を押すとぺこぺこしてとても軽くなっているのです。皆さんも秋にどこかで赤くなったものを見た記憶があると思いますがが、奇妙に赤く、葉が枯れ蔓も枯れているのに実が落ちずにぶら下がっているのを不思議に思たことがありませんか？ やっと訳がわかりました。本当に軽くなっているのです。

からすうりについて知りたいと思いインターネットで調べてみたところ、「名前の言われは、からすが食べ残したうりに見立てて「からすうり」と言うようになったとか。瓜科の雌性多年草、雌雄異株で、花は夏に花弁が五つになって先の方から網状（フレア）の細かく裂けた白い花を咲かせる。夕方に開いて朝にはしぼむ（まるで夜の蝶?）、長く糸を引いた白い花びらはまるで天女の羽衣を思わせるらしい。又根から取った澱粉は天瓜粉（てんかふん）等の薬用、又生薬の土瓜根（どかこん）として黄疸・利尿・催乳剤。果肉は化粧料に使い、ひび・あかぎれ止めとして用いられ、種子は薬用・食用」とのこと。

赤くなるからすうりとは別に黄色くなるキカラスウリもあり、果実は赤いからすうりよりも一回り大きいということです。（本当の天瓜粉は黄からす瓜から取れるものを言うらしい）こうしてみるとからすうりが大変身近なものとして感じられて来るるのですが、昔の人が自然のものを目敏く利用していたのはまさに「生きる知恵」自然と共生するエコロジーそのものと言える気がします。

余談ですが、からすうりの種は黒くて大黒様に似ていて、財布に入れておくとお金が入って来るとか。　で、さっそく種子を取り出して見ますと、正面からみると顔の両側に膨らんだ頬があり大黒様の顔に見えました、見えました。と言う訳で、すぐに私も一粒を財布に入れている次第ですが……。欲しい人は言って下さい、まだありますので差し上げます。それから今年は「からすうりの花」が咲いているところを是非見に行きたいと思っています。　夜しか咲かないということなので夏のくろんど子供キャンプにチャンスがあるかもしれません。　レンジャーの皆さん、キャンプに参加して見に行きましょう。

2004/2/29

武田敏文

くろんど観察記　～なんでだろう？？冬編～

＊冬というと…やっぱり寒い！寒いということは…、やっぱり人間の心理として、こどもの頃ならともかく、あんまり外へ出たくなくなるものでなのです。でも、おとなになっても雪が積もったりするような日には、何故かワクワクして喜んで自然あふれる場所へ出かけたくなるものらしい。今年の冬、くろんどでの一番のトピックは１月１８日、翌週のイベントの下見に訪れた日に雪が積もっていたこと！人もほとんどいない、鳥の声もほとんど聞こえない、そんな寂しい園地に出掛けることが、とてもヒーリング効果をもたらすことに気付いた。“気”を感じた１日、自然のエネルギーが溢れていた１日。何もないことの素晴らしさを実感した。

＊とはいえ、何もないようなメチャ寒のくろんどにも、自然は不思議な姿を見せてくれる。この日一番の不思議発見は、ツチグリが異常発生していたこと、あちこちでボコボコとヒトデのような姿が土の中から溢れだしている。僕はツチグリは初夏の頃のものだと思い込んでいたのだが、調べてみると春から秋までは出てくることがあるらしい。だが、いくら調べても厳冬期にツチグリが出てくるなど、どこにも書いていない。不思議なことだが、よく考えてみると胞子で繁殖するキノコ類には水がなければ、その勢力を広めることができない。この日の午後雪が溶けて土壌が湿っていたことを考えれば、実に合理的にツチグリは開いて胞子を飛ばしていたのだ！ツチグリの出現は温度に関係なく湿度が影響していることを実感した。ちなみに武田レンジャーの調査によると、閉じているツチグリを持って帰り水道の水滴をポタポタと垂らしていると開いてきたそうである。土から離れてもツチグリは生きているのである。

＊冬の観察はなかなか難しいが、探せば色々といるものである！昆虫類やクモ、ムカデなど幹の間、葉の裏、土の中、朽ち木や倒木の中・・残念ながらこの頃、見つかるのは“気持ち悪い系”が多いのだがたくましく生きている彼らを観察していると、冬以外にはそんなことを絶対思わないのに、何故かいとおしく思えてくるのである。

＊冬のくろんどでもうひとつ！かなり大きな霜柱が第二キャンプ場のテントサイトの湿った場所にできていた。僕も見たことがない訳ではないが、少なくとも大阪府内であれほど大きな霜柱は初めて見た。こどもたちにはかなり不思議な現象に思えるようで、観察会の時、持ち帰った子がいた。家まで溶けなければよいのだが？？

＊とりあえず、このコーナーでずっとくろんど産の“四季の自然食”について書いてきたので冬でも見つかったこと記しておきます。くろんど園地のある場所にフユイチゴが食べきれないほど実っていることを発見したのです。これで嬉いました！春のタラ、コシアブラ、タカノツメなどの山菜。初夏の３種類のキイチゴやヤマモモ。秋のクリ、アケビ、ムカゴ、スダジイ。くろんど園地は食の宝庫だったのです。来年が楽しみだ！

＊ずっと寒かった今年の冬、それが２月半ばを過ぎて突然暖かい４月並みの日が続いた。２月下旬にくろんどを訪れると、１ヵ月前にはあれほど寂しかったくろんど園地にたくさんの鳥が飛びかい、春を迎える準備を始めていた。コゲラの木をつつく音もあちこちから聞こえてきた。そういえば１２月に園地の管理道でヤマドリのオスが横切っていくのを初めて見た。生きものたちは、やっぱりどこかで寒い冬を乗り切っているのである。冬はダイナミックな息遣いは見えないけど、“いのちの尊さ”について考えてみるにはいい季節だと思う。今年の冬は特に巷間で“生きることの尊さ”をあまりに軽視したような話題ばかりが多発した。自然観察をしていると色々な思いがふつふつと湧いてくることがある。

くろんど園地パークレンジャー　くまさん

樹木物語

9期　荒川 雅夫

"木を見て森を見ず" この句は"You cannot the wood for the tree" の和訳である。物事の細部にとらわれて大局を見失うことをたとえていう。"木を見て山を見ず" "森の中にいると森を見えない"

府民の森は、自然公園、森林公園、小川草木鳥獣、魚虫のいる公園です。春夏秋冬の四季にいろいろな景観を見せてくれる公園です。パークレンジャーは「人と自然をつなぐパイプ役」です。一木、一草、木花、草花、百花繚乱と府民の森はいろいろと見せてくれる。

樹木物語(Tree　story)として、ガイドウォークや樹木ウォッチングの参考になればと思っています。

その一 「 松 」

マツ科には30種あるが、日本に自生する代表はアカマツ(常緑高木、樹皮は紅褐色) 、クロマツ(樹皮は灰黒色、砂防林に植栽)、エゾマツ(北海道など亜寒帯に多い)、カラマツ(落葉高木、本州中南部に自生)など。天然のクロマツは海岸の岩場に自生し、天然のアカマツは内陸里山の尾根筋や岩場に、あるいは火山の山麓地帯に自生する。

日本のマツを代表するクロマツ、アカマツはともに見慣れたものであるが、クロマツの方は、その葉が硬く長く緑色も濃いなど一般に強いという印象を与えるので雄マツともいわれる。これに対してアカマツの葉は軟らかくその色も明るい緑色で、全体にやさしい感じがあるので雌マツという呼び方もある。

日本人に親しまれているマツは庭園樹が主であるらしい。あの非対称の独特の曲がり方をした樹形が日本庭園によく調和し、さらに能や歌舞伎の舞台にまで描かれているのである。最もこういう場合に登場するのはアカマツよりクロマツが多い。松が好まれる理由の一つは常緑ということであろう。常緑の樹木に永遠の生命というべきものを感じるのは、多くの民族に共通の心情らしい。ただし日本では、それが信仰につながって、やがて常緑の樹木を神の依代(よりしろ)とするようになった。門松にマツを用いることは平安時代末から鎌倉時代に一般的になったといわれている。こうしてマツは信仰の対象であると同時に「めでたさ」の象徴ともなった。

その二 「 陽樹と陰樹 」

陽樹＝日当たりを好む樹木。陽樹の種は直射日光のよくあたる乾燥した裸地でよく芽生え、定着する。逆に落葉の積もった暗い林内では発芽せず、また発芽したとしても稚苗は生きていけない。陽樹は荒れた裸地を緑化していくので「パイオニアプラント＝開拓植物」と呼ばれている。

日本のような温暖多雨の風土では、自然のままにしておくとすべて森林となる。では、裸地を必要とする陽樹はどんなところで生きるのだろうか。日本は火山国で地形が険しく、そのうえ梅雨と台風の季節にはしばしば集中豪雨が発生する。山は崩壊しやすく川岸は土砂で埋まる。そんなところが陽樹の活躍の場となるのである。

陰樹＝林のなかの少ない光でもよく生きていく樹木。陰樹の子どもは母木の下で育ち、母木が枯死した跡は子どもの木がその空間を占め、親の跡を受け継いでいく。陽樹の種が親元を離れ、新天地を求めて旅立っていくのに対して陰樹は2代、3代と、同じ森林社会を継続していくのである。

シラカンバ、ヤヤハンノキ、ヤシャブシは代表的な陽樹です。アカマツ、タニウツギ、ヤマハギ、タラノキ、ヤナギ、ヤマウルシ。山火事跡地や土砂崩壊地などのような荒地に真っ先に侵入、定着し、そこにいち早く樹林を形成する。そして年月が経過するとともに比較的早く枯死し、落葉や枯れ枝や腐った根は土に混ざって腐葉土となり、土壌を豊かにし、あとに続く樹種、ミズナラやブナのために生きる基盤を準備する。それは陽樹が森林生態系のなかで担っている任務ではないか。

アフリカのサバンナで出会った動物たち　　Ｖｏｌ　2

小西　茂

ジャンボ！　（ケニアの挨拶です、朝でも夜でも、誰にでも会ったらお互いに、ジャンボ！　その時の笑顔がまたいい）朝食は毎日フレッュジュースから始りました。私のお気に入りは、マンゴージュース、　他のパパイヤジュースや、パッションフルーツ、オレンジも飲んだけどマンゴーの甘すぎない所が朝の体に丁度よい。今日の予定は、マサイ族が暮す“マサイ村”の訪問です。ロッジから２０~３０分たっただろう別段回りに何も無い草原の真ん中に、彼らの家の集まり、つまり長屋の端がつながって大きな輪になった感じで、中心部が広場になっている。家の周りにはアカシアなどの刺のある木を張り巡らして　ライオンなどから牛やもちろん自分たちが襲われるのを防いでいます。家の素材は、牛のウンチと土を混ぜたものを、塗り重ねて作られていて、内部は３部屋くらいに分かれているらしい、実際に中に入れてもらったけれど、ほんの少しの窓らしきものがあるだけで、慣れるまでは鼻をつままれても、どこに誰が居るやら判りません。もちろん、電気、ガス、水道があるわけも無く、日が昇れば起き、暗くなれば寝る、そんな当たり前の生活がありました。

さて、Ｖｏ１１でも書きましたが、マサイ族たちの間にも“お金”という物が流通しています。本来、マサイ族は牛を放牧し、牛と大地の恵みで暮していた部族でした、彼らの主食は乳に牛の血を混ぜたものでした、“お金”など必要の無い生活様式が彼らには有った訳です。誰が悪い，良いという問題でなく、彼らにとっては”世界観“”価値観”が大きく変わった事は解ります。私たちが訪問したマサイ村も、彼らの大切な“ビジネス”になっていました。まずマサイ村に入る為に、一人 25US＄（約 2500 円）が必要です（写真撮影も OK）非常に高い入場料？（２時間もいたかな？）そこでは私たちはお客さん、まず歓迎の為の儀式？をしてくれます、マサイも私たちも皆しゃがんで、一人の男が何かしゃべると、その後に続いて「Nai」（ナイ）と言います、それを何度か繰り返して、歓迎の踊りになります。男たちの「ジャンプ」です。180ｃｍ以上あるだろう彼らですから、優に 2mは超します。マサイ族の男たちはライオンを取れなければ認めてもらえないそうです。そのため高くジャンプしてライオンがひるんだ瞬間に槍を打つのだそうです、失敗すれば食われます、帰ってこない男たち大勢います。そのせいか、ここでは一夫多妻です、この時のマサイ族の案内係？

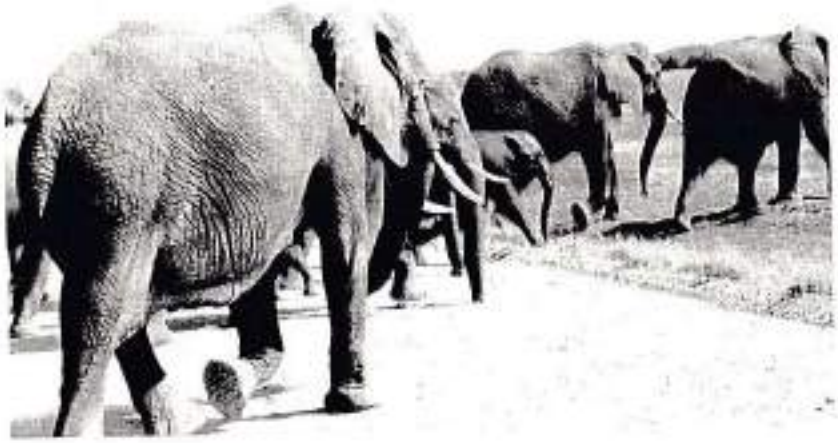
リチャード（マサイ名　Leken）も８人の奥さんがいます、毎日違う奥さんの所に泊まりに行くそうです（なんと羨ましい）、奥さんの年は 16 歳から 18 歳位だそうで、奥さんそれぞれに子供が居るようです。こういう家族が集まり、一つの大きな家に暮して行ける生活環境と価値観は私たちには真似は出来ないでしょうが、今の自分の生活が本当に“幸せ”なのと問いかけたとき、彼らの方が”幸せ”なのかも？と考えさせられるモノがありました。踊りの後は［Make a fire］火起しです、彼らの方法は”きりもみ式”と呼ばれる、道具は使うがかなり原始的な方法です。切り目を付けた板に棒を立て、錐で穴を開ける要領で手を激しくこするだけですが、それだけに体力勝負、さすがに一人ではしんどいらしく、何度か交代してわずか 2～3 分で種火から“ゾウのウンチ”に移して見事に“火”を作り上げました。一同感動の拍手、“ゾウのウンチ”は植物繊維 100%の乾燥物で周りにいくらでも転がっていますから、すばらしいリサイクルであり、何処でも火が使える訳です。私も「火越し」をやりたくて「ゾウのウンチ」をお持ち帰りしたかったので、持って帰っても良い

かどうか内山さんに聞きますと、そんなこと聞いた奴は初めてだが、細菌とか色々ややこしいから、止めた方が良いだろうとの事で、泣く泣くやめましたが、ああ「ゾウのウンチ」がほしい？

部屋の中も見せてもらい、広場に出て行くとそこも"ビジネス"の場に成っていました、彼らが作った装飾品が並べられていて、買ってくれと寄って来ます。ビーズの付いた腕輪、ネックレス、ライオンの牙などなど、みんな彼らの言い値ですし本当にライオンかどうか判りません、幾らでも交渉次第でディスカウントする、始めの値段は、ケニアシリング（Ksh）かUSドルで払うか聞いてくる、たとえば腕輪が800Ksh（約1300円）とすると300Ksh（約500円）位に下がった時に、100US（約1000円）でどう、聞かれてあまり考えず買ってから後で、何も安くないやん、て事もあります。マサイ族がみんな儲け主義に成っているとは思いませんが、他の土産物屋でも見うけられる事でした、それをマサイ族が真似しているのかも知れません。これは買い手側の認識度の問題でしょうね。内山さんの言われるには、「僕はここが安いとか、何がいいとかは言いません、少しばかり高くてもあなたが良いと思えば買いなさい、でも、その値段がここでの生活でどれ位の価値なのか、よく考えてね」とニッコリ笑います。ホテルでは、ディスカウントしませんが大体の相場がわかります、みんなも３日目位になるとそう高い買い物はしていなかったでしょう。

マサイ族にも色々な薬がある事を教えてくれました、"エゴスア"と言って草を乾燥したもののようでしたが、（ケニアのバイアグラ）だそうです、そりゃ８人も奥さんがいたらマサイの戦士も大変なのでしょう、このアンボセリは、非常に竜巻の多いところで、たくさんの竜巻を一度に見ることもできました、彼らはアンボセリ、ウィーバー？と言ってました。また、キリマンジェロ山雪解け水が湧き出ている為湿地帯が多くあり水鳥たちにも会う事ができました。御一緒した静岡市立日本平動物園の鈴木さんとは、同室のおかげで、いろいろと鳥や動物のことを教えて頂きました、「シマウマなんかも毛並みが全然違うし、アオサギでもきれいに見える、やっぱりストレスが無いんだろうか」と言われてました。鈴木さんは外国の動物園は何度か視察されているそうですが、アフリカに来るのが２０数年来の夢だったそうです、やっぱり「野生の王国」はすばらしいと二人で毎夜話してました。

マサイ族村訪問のあとは、またサファリ、ここではゾウの群れに度々出会うことができました、ゆっくりサファリカーの前を横切る家族や、水浴びする家族、大人たちが集まり影を作りその下で寝ている子ゾウ、２日目も同じロッジに泊まり明日は「ナクル湖」へフラミンゴ達を見に行きます。明日の朝が、Ｍｔ．キリマンジェロを眺められる最後のチャンスです。



おいしくアウトドア！　Vol. 4

なかじぃ

春の訪れは、野山を歩くと一目瞭然！おいしそうなものが、ニョキニョキ、スクスクと芽吹いています。今回はこの季節にしかできない山菜、野草クッキングにチャレンジ！

食べられる植物は、とてもたくさんあります。何の気なしに見過ごしている草花も、昔の人たちにとっては大切な食料であり、薬であったりしたのでしょうね。
園地内でもよく見られるものをいくつか紹介します。

タラの芽　3～10cmに伸びた１番芽だけを採りましょう。
天ぷらならそのままで。塩茹でして、おしたしやごまあえに。

★タラの芽のおき火焼き

❶丸ごと竹串に２～３個刺す。

❷タラの芽に味噌をまぶす。

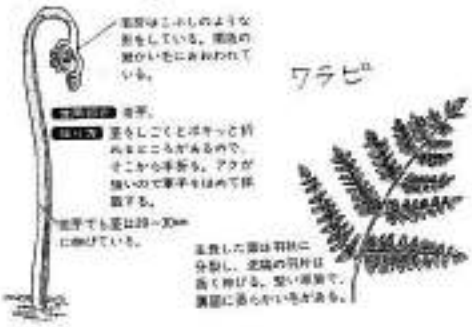
❸火を起こし、そのおき火で焼く。家庭で味わう場合には網焼きでよいが、遠火で焼く。

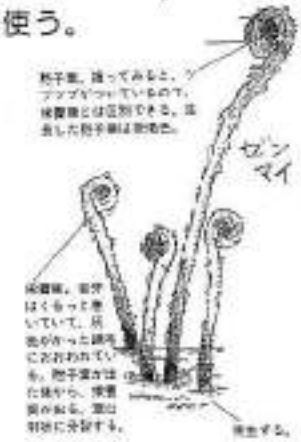
セリ　葉、茎は塩茹でして
おひたし、和え物、汁の実に。
水際に生える根はごま油で
炒めて甘辛く味付け。

※ 毒ゼリに注意！

根茎は食用のセリにくらべて、太くて大きい。竹のような節がたくさんあり、ひげのような根も出ている。

ワラビ
ゼンマイ　若芽をポキっと折れるところで
手折る。アクが強いので重曹か
木灰でアク抜きをしてから使う。





クサソテツ（コゴミ）　綿毛に覆われていない若芽はアクも苦味も少なく、さっと熱湯をくぐらせて
おひたしに。マヨネーズや酢味噌和えにも。

フキノトウ
フ　キ

初春に出るフキの花蕾がフキノトウ。外側の苞葉が開きすぎていないものを。
天ぷらならそのままで。フキの葉柄はアクが強いので塩をすり込んでから
ゆでて、水にさらす。甘辛く煮詰めるとキャラブキになる。

★フキのトウの味噌焼き

ヨモギ

軟らかい新芽をつんで、そのままてんぷらに。
ゆでてすりつぶし、白玉粉に混ぜてヨモギ餅。

ツクシ

ツクシはスギナの胞子茎。10～15cmのものを
採り、節ごとにあるハカマをとり、さっとゆでる。
ごま油で炒めたり、味付けして卵とじなど。

タンポポ

セイヨウタンポポの根はかなり太くごぼうのよう。
ほろ苦く柔らかで、きんぴらにするとおいしい。

タカノツメ
コシアブラ

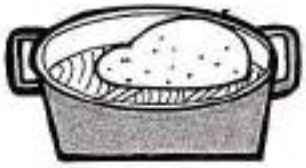
どちらも春の柔らかい若い葉を天ぷらにすると、おいしい。
タカノツメは葉が３枚。コシアブラは５枚。

《アク抜きのポイント》 ワラビ、ゼンマイなどアクの強いもの

● 木灰を使う場合

❶鍋に山菜を入れて、木灰をかける。

❷熱湯をかける。


❸重石をして、一昼夜おく。

❹水洗いする。

最後に言うまでもないことですが、国立、国定公園や自然保護地域では採取はできません。
また、根こそぎ採ったり、土を掘り起こして放置したり、人間の都合だけで環境を変えて
しまうようなことは、やめましょう。

ちはやイベント　“雪と遊ぼう”　報告

ちはや班　荒川雅夫

２月８日のイベントは、昨年９月のスローライフキャンプ終了時から準備に入った。森下さんの案で、現地集合、現地解散。高田さんの案で温かいものを供する、ということに。当日、雪があるかどうか不安であった。１２／１３金剛山、初冠雪のニュースが入り、１２／２１早速ちはや園地に行く。田島さんのガイドウォークについていく。昼から岸本所長の門松のクラフトの手伝いをする。１２／７のクリスマスリースの時も補助として参加した。

２／８のイベントに工作室の使用も許可を得た。年がかわってからは、雪がある状況で、イベントの計画を進めることにした。ちはや園地班は、高田さんと私、応援スタッフに高橋さん、武田さん、現地職員の田島さん、公社から諸岡課長、脇中さんと、イベント参加者２３名。晴天の中楽しいイベントとなった。

下見の時は武田さん、高田さん、私はロープウェイで登り、雪の園地内、小一時間、雪だるま作りの場所を決め、雪道の散策に、動物足跡、樹木の冬芽、雪の結晶、雪中温度、樹氷…。

森下さんも加わってレストハウスで昼食。当日は星と自然のミュージアム２階で参加者の食事を決める。その後、田島さんに入ってもらい、ミーティングののち下山。

２／２の打ち合わせで雪のない場合に高橋さんに任せることに。２／３節分、２／４立春、寒波が押し寄せ、金剛山は雪景色となる。

前日、２／７（土）高橋さんが現地におられると聞いて昼からちはや園地に登る。園地内をまわったが雪が少ない。

当日、公社脇中さん、高橋さん、武田さん、に雪だるまの製作場所を四季の広場のデッキとし、ロープ張りで場所確保。田島さん、諸岡課長、高田さん、私はガイドウォークの雪道の下見をする。

２／６段階で参加者１０名、現地での広報の効果ありで当日参加者２３名に。

当日、ロープウエイ初発９時、ロープウェイ組と伏見林道登山組に分かれて登った。雪は少なかったが、雪道の散策、雪だるま作りが出来たことはラッキーであった。少ないスタッフで２３名の参加者のイベントはきつかったと思う。もう２名欲しかった。雪のイベントは天候に左右され寒波に一喜一憂したが、ちはや園地の冬のイベントとして定着させたいものである。

「この１年間を振り返って」

1期　吉野　公美

長かったような、短かったような１年でした。昨年度よりは若干、参加回数も増えて自分なりに活動できたかなと思います。しかし、まだまだ他のメンバーに頼っている部分がかなり多くて、ご面倒をおかけしています。１６年度は、さらに修行を重ね、もう少し前進できればと思っています。

公社へもお願いが多々あります。毎年、言っていることに変化があまりないのですが、早い話、「お役所仕事」で片付けられている事が多くあります。いい加減、気付いてください。なかでも、公社の担当者が移動になるたびに、悪しきお役所仕事が引き継がれ、良かった部分の多くがクリアーされて、新年度が始まると、また同じ問題が提議されています。いい加減、なんとかなりませんか？また、もう少し一般企業的な、いい意味融通のきく（余裕をもった）こころの広さも持ってもらいたいです。いい大人同士なのですから、レンジャーとの会議の方法ももっと効率よく進め熱くならず冷静に、よい議論をお互い心がけたいものです。あと、いつでも公社の意見・結論は確定させてください。担当者やその場によって結論が変わると、イベント運営にも大きな影響がでます。逆に、どうにでもとれる曖昧な結論もいけません。最後に、よいイベントを作りたいのであれば、公社自身も他団体にもっと修行に出ていただきたいものです。

１６年度がみんなにとって今年度よりもっと良い年になりますよう、切に願います。

来年度 継続するか…

5期　中村 孝子

先日、最新号のインフォメーションを読んで、継続する自信がなくなってきました。「イベント当日だけ参加して何ができるのか」という文面が心にひっかかったのです。今年度、イベントや研修には参加したものの、平日の打ち合わせや会議にはほとんど参加できなかったからです。

不安な中、3月、くろんど園地でのレンジャー講座の下見、パノラマハイクの下見に行きました。その際、「たこちゃんがやめたら寂しいやん」との言葉をいただき、ふみとどまることにしました。現に、イベントのスタッフが足らないという状況もよくあり、せめて当日だけでも応援したい気持ちはあります。そんな中途半端な人材は要らない、と言われるのなら、それまでだと思っております。でも本音は、素敵な仲間と活動を共にしたいと思っています！

この一年お世話になりました

4期　角野和彦

今年は、９月と１２月の２回のイベントに参加しました。９月は、園地内をゲームや観察をしながら、散策しました。むろいけ班のレンジャーや園地職員のアドバイス、そして当日野鳥調査をされていた関氏の協力で、当初考えていた以上の内容となったように思います。伝えたいことが伝えられたわけではありませんが、自然との親しみ方を少しでも提供できたかと思っています。むろいけ班のみなさん、園地職員のみなさんお世話になりました。

パークレンジャーになって私は、ふだん何気なく見ていたものに興味を持ったり、自然と親しむ、あるいは楽しみ方を知ったように思います。その時の感動を提供できれば良いなと思いやってきました。気づくことの大切さと難しさを感じながらこれからも自然に触れていきたいです。園地がそのような場であって、レンジャーがその手助けをしてくれるといいですね。

この一年間を振り返るよりも、来年度を思い

来年度のむろいけ班（というよりも、私個人）の活動として、４月から翌２月までの毎月１回、「森の自然教室」と称してミニイベントをおこなうことにしました。

決まった日程で、毎回タイトルを決め、予約制で行うのは少しプレッシャーを感じるものの、また刺激的でもある。小学生ぐらいの子供のいるファミリー層を対象とし、自分一人（できれば補助が一人）で出来るように 15 人程度の少人数でおこないます。

自然に興味を持って欲しい、体と心で様々な事を感じて欲しい。
街中育ちの私が、レンジャー活動で得たことを、その想いをうまく伝えるために・・・どれだけ出来るかわからないが、がんばっていきたいと思います。

また勉強することが増えてしまった・・・

かなざき ひろたか

１０期　武　田　敏　文

１０期 たけぴーです。１５年度もあっという間に過ぎ去って行こうとしています。今年度は４、５、６月、の公社の自然解説・ネイチャーゲーム研修に続いて、担当園地別の活動開始へと慌ただしい中にも私にとっては充実した年でした。くろんどのイベント参加は勿論として、ほかの園地主催のイベントにも参加して色々な活動を経験できたし、同時に先輩レンジャーとの交流もできました。
日常的な園地活動については、くまさん(10期 奥田さん)から次々に繰り出されるパワーに触発されて、くろんど園地の掲示板作りやくろんど通信の記事作り、又特に園地でのガイドウォークの実践は、私にとって今後のレンジャー活動に大変大きな目標です。

私の１６年度の目標は、自らプランしてレンジャー活動を進めて行くということです。何時もただイベントに参加すると言うのではなく、何か独自のものを企画・実践すること。そしてビジターにはくろんど園地の多彩なルートや季節の自然を紹介すると共に、周辺の歴史を知ってもらい新たな興味を喚起してそれを楽しむこと、大切にしていくことを知ってもらうと言うことです。

先ず第１番目として、３月２８日の「ミズバショウハイキング」、次に６月の「ほたるキャンプ」等等、是非成功させたいと思っています。うまく行けば今後くろんどの定期イベントになるようにしたいものです。レンジャーの皆さん、Nature Guide 役(自然案内人)としての実践のチャンスです。参加お待ちしています。

今、思うこと。

９期　なかじぃ（中島 弥香）

レンジャー活動をはじめて３年が経ちました。今年度は休日の大半をレンジャー活動に費やしました。そして合間の平日にはミーティング。１９時に公社に着くには、こっそり職場を抜け出して…。ボランティアやのに、そこまでやらんでもええのんとちゃう？ 時々自問してみるけど、何故か…行きたいから行ってしまう。そんな感じかなぁ。「ハマる」っていう言葉はあまり好きではないけど、ちょっとハマってしまったのかもしれません。北部班の活動については、クマさんのリーダーシップに引っ張られ、メンバーの意識もとても高まったと思います。他班のイベントにも工夫されたものがいろいろと実践され、拠点活動も徐々に軌道にのってきたのではないでしょうか。ただこの１年、ずっと残念に思ってきたことは、せっかく準備したイベントへの参加者が思いのほか少なかったことです。募集人員の８割以上の参加者があったイベントがいくつあったでしょうか。少ない参加者にも丁寧に心をこめて対応する、のは当然ですが、やっぱりせっかくのイベント、定員いっぱいになるような盛り上がりが欲しいものです。早め早めの計画と広報はもちろんのことですが、各園地の特徴を活かした定番的なイベントやリピーターを増やすことでビジターの口コミでの参加者増など、いろいろ考えるべきことはあるのではないでしょうか。みんなそれぞれの仕事や生活を持ちながらの活動でなかなか一気に新しいことはできませんが、「三人寄れば文殊の知恵」で、２００４年度もがんばっていきましょう。

【１年を振り返って】

１０期　奥田 浩司

拠点活動１年目ーまあ色々あったけど、楽しい１年でした。活動の幅も広がったし、未来へむけて展望が開けてきたと思う。問題山積みのまま見切り発車した北部園地での活動。でも仲間に恵まれ、チームとしての結束力が１年間の活動を通じて高まり、いい意味で前例にとらわれない活動が出来たと思う。でも公社との関係にはまだまだ改善すべき点が多い。コミュニケーション不足が改善されないまま１年が終わった。レンジャーは組織の人間としての公社職員の立場を理解する必要があるし、一方で公社もボランティアとしてレンジャーがどういう思いをもってこの活動を続けているのかを理解しなければならないと思う。パートナーシップを築くとはどういうことなのかということについて、来期は公社へ具体的な提言をしていきたいと思う。Ｒｅｂｏｒｎ、パークレンジャー！Ｒｅｂｏｒｎ、みどり公社！うち破れ、組織の壁。次の１年は動ける組織を構築し、もっともっと楽しい活動をやるぞ～！！

森の入り口

今年度私が関係した主なイベントは、秋のどんぐりのイベントと冬のバードウォッチングでした。どんぐりのイベントではいろいろなクイズを設定していたのですが、一番最初の設問は「どんぐりという木の名前はある？ない？」というもの。鳥のイベントはタイトルも「『はじめての』バードウォッチング」でした。

どのような人を対象にするかによって伝え方や伝えたい内容も変わってきます。思えば今までもずっとそうだったのですが、今回は特に「はじめて」だったり『なんとなく』の人を意識してました。訪れる人たちに、見逃してしまいがちなものに目を向け、気づき、疑問を持ち、感動し、興味を持って欲しいという気持ちでいます。

私はこれからも森の入り口あたりで頑張っていけたらな、と思ってます。

２期　　西出　こんちゃん

【過去１年を振り返って、これからの１年への思いを馳せて】

１０期　奥田浩司

年をとるとだんだん１年が早くなるというが、この１年は本当に短かった。パークレンジャー活動だけをとってみてもかなりきつい日程。他の活動を含めると土日の多くが自然環境系の活動として過ぎていった。家族と過ごせる休日が少なった分、できるだけ時間を充実させようという気持ちも強くなり、活動も楽しいから、あっという間に毎日が過ぎてゆく。私はまだ人生の半分しか生きていないけど、折り返し後半はもっともっと充実した人生が送れたらいいと願っている。

前説が長くなったが、この１年それなりにパークレンジャー活動に力をいれて活動してきた。何をやったかはひとつひとつは書かないが、とにかくこの年度始めに拠点活動を主眼においた活動を展開していくという方針が打ち出されたことは、私の活動意欲をとても刺激した。パークレンジャー活動が単なるイベント屋としての機能だけでなく、本当の意味でのパークレンジャーに一歩近付けるような気がしていた。そんな期待が膨らむ中で１年がスタートした。

ここで少し「パークレンジャー」について記しておきたい。パークレンジャーとは本来、日本以外の多くの国では、国立公園もしくはそれに準ずる自然公園の自然保護官だけが名乗ることができる、非常に権威のある、国民からはリスペクトされている人たちのことを指しており、当然のことながら勝手にパークレンジャーという言葉を使用することはできない。彼（彼女）らは知識と経験と技術を持ち合わせた素晴らしいインタープリターであると同時に、ホスピタリティーあふれるエンターテイナーでもあり、自然への畏怖感と深い愛情をもって接することのできる真のナチュラリストでもあり、植物・動物・菌類・気象・地質などのついて熟知した優れた自然科学者でもあり、公園内の地理を熟知し土木・建設・園芸・法律などの知識も習得している公園管理者でもあり、そして（国や州によるが）格闘技や拳銃の使い方も習得し、盗掘や密猟などの違法行為を行なう者に対する警察権をも持っている…それほど絶大な存在なのだ。私はアメリカとマレーシアで本物のパークレンジャーにガイドしてもらったことがあるが、話の内容を１００％理解できるわけではないのに、心にびんびん響いてくる迫力を彼らは持っていた。残念ながら日本の国立公園のパークレンジャーは単なる書類屋の公務員というイメージが濃く、むしろ日本で諸外国のパークレンジャーのイメージに近いのは日本野鳥の会や日本自然保護協会などの民間団体が名乗っているレンジャーだ。もちろん彼らには銃を所持する権限もないし、諸外国のレンジャーとは格段の差があり、人によってもレベルの差があるが、それでもレンジャーとしての総合的な知識と技術は習得している。だから外部の人と交流する時に、私が「パークレンジャーをやってます。」というと「へ～、すごいですねぇ！」と言われて戸惑うことがある。対外的にパークレンジャーを名乗ることが、自然体験活動の現場で活躍している人に対して、何かすごい人だという印象を与えていることがあるのだ。説明が長くなったが、パークレンジャーという言葉は相手に「プロフェッショナル」というイメージを与えるような、重みがあるということを、私たちは理解しておかなくてはならない。

そこで振り返って、この１年間、私たち「府民の森パークレンジャー」は何をやってきたのか？相変わらず活動の主はイベントであった。しかも年度末のどう考えてもお上から下りてきた縦割り役人の論理に基づいた、予算消化だけを目的とした、本質を見失ったイベント連発に代表されるようなドタバタイベントが多かった。正直、一府民としての立場から言えば、多くの人が路頭に迷っているこの不景気の中、いったい税金を何だと思ってるんだという怒りすらわいてきたこともある。また公社に対してだけでなく、税金ドロボーと言われても仕方ないようなことに関わっている自分自身への呵責の念も禁じえなかった。税金を使ってやっている以上は、イベントをするにしても、ある程度自然環境の問題解決につながる公益性のあるイベントをしなくてはいけないと思う。私たちは「府民の森パークレンジャー」であると同時に一府民でもある。府民の一人として、府民の立場にたった公園づくりを提言してゆくのも理想的なパークレンジャーのひとつの姿でもあると思う。

今年年頭にメーリングで公社とパークレンジャーのあり方についてメーリングで提議したが、役人と市民がケンカをする時代は終焉をむかえた。ネガティブな批判合戦ばかりを繰り返していては、いつまでたってもこの組織は前へ進めない。レンジャーは公社が線路をひいてくれるなどと、いつまでも甘えていてはいけない。所詮公務員は３年おきに転勤があり、公社サイドにノウハウが蓄積されていくことなどはありえない。レンジャーが「府民の森パークレンジャー制度」を構築していかなくてはならないのだ。今、日本をリードしている民間の自然

学校や環境団体は、全部関連省庁や自治体に対して政策提言する能力を持っている。ネガティブだけでは自立できない。オルタナティブがあってこそ自立できるのだ。公社とパークレンジャーがどうすれば共存できるのか？お互いの立場を読め合うことができるのか？公社もボランティアが何を思い、何を考え、どういう目的でボランティアを続けているのかについて真剣に考えて欲しいと思う。ボランティアに役人の論理、お金をもらって働いている人の価値観を持ち込むとうまくいかなくなるのは当然なのだから。お互いが相手に利益（精神的な意味も含め）をもたらすwin-winの関係とはどういうことなのかを考えるのがコーディネーターの最大の仕事なのだが。

とにかく私としては、去年１年イベントとは別に少しでも本当の公益性のあるパークレンジャー（地球環境を護るなどという大それたことを言うつもりは毛頭ないが。）に近付けたらという思いの下、いくつかの新しい試みとしての、別視点からのインタープリテーションにも手をつけてみた。掲示板の制作、通信誌の発行、ガイドウォーク、ノートの設置、ネイチャートレールの設計にもとりかかっている。もちろん一緒に１年間活動してきた仲間がいたからこそ、ここまでできた。ひとりじゃ、何もできやしなかった。公益性のある、テーマのある園地を作るという目的を果たすための糸口がくろんど園地での１年間の活動でぼんやりとながら見えてきたような気がする。

私個人の意見だが、やはり例え『府民の森パークレンジャー」であってもパークレンジャーを名乗る以上はイベントばかりに目を向けるのではなく、「環境教育」「環境調査」「環境管理」というパークレンジャーの３本柱と呼ばれるものについての基礎的な知識は身につけておくべきだと思う。専門的なレベルを要求するわけではないが、ずっと誰かに教えてもらえるという意識を持ち続けていてはいけないと思う。残念ながら公社にはそれを教えてくれるような蓄積は何もない。人をつなげる技術についての蓄積もない。また外部の専門家とのネットワークも乏しいし、外部へ打って出て自ら学んでこようというチャレンジ精神も感じられない。それが現実なのだから、待っていたのではいつまでたっても何もできないままである。ただ言えることは、府民の森パークレンジャーが単なるイベント屋でなく、色々な機能を持たせることによって、その人の個性・持味を生かせる幅がぐっと広がるということだ。イベントを前面にたってひっぱっていく人だけがレンジャーではないし，自然解説ができる人だけがレンジャーでもない。スキルはなくても、その人が自分の特性を生かしてチームの中のポジションを見いだせばいいと思うし、「字がうまい」「パソコンが扱える」「絵や音楽ができる」のもインタープリテーションには欠かすことのできないスキルだ。私はこの１年そんな素晴らしい「府民の森パークレンジャー」たちに随分助けられてきた。ただ、全体として向かおうとしていることに対して、何も自分の居場所が見いだせないというのでは、やはりパークレンジャー失格だと思うし、ずっと人任せで自ら向上しよう、学習しようという気持ちのない人には府民の森パークレンジャーで居て欲しくないと思う。

で、現実を顧みて、次の１年、私たちはどこへ行こうとしているのだろうか？相変わらずお上へ具体的な報告書をあげやすい、表向きのアピール度が高いイベントばかりを本末転倒でゆとりのないタイトなスケジュールでこなしていくことになるのだろうか？最初に戻るがイベントをやるだけなら拠点活動を基本にした意味がなくなると思う。拠点を定めて活動する先には園地をよく知り、園地管理や園地調査、あるいはイベント以外のインタープリテーション（ガイドウオークのようなパーソナル、掲示板やネイチャートレール、会報のようなノンパーソナルの両方）といういわゆる本当のパークレンジャーが育ってゆくという意味が含まれていると思っている。拠点活動を続けることこそ、パークレンジャーという組織としてのノウハウの蓄積につながるのだと思う。そこに手をつけないようではパークレンジャーという言葉の意味が生み出すギャップをいつまでたっても解消できないと思う。

日本の行政は相変わらず縦割りで、以前と変わったのは看板だけで実情は何も変わっていない、まさに行政のシステムが限界にきていることばかりが印象として残り、とりわけ環境教育の分野では民間に比べて大きく立ち遅れていることを強く感じてきた１年間であった。と言いつつも２００３年度には現場活動の問題として「レンジャーの絶対数が少ない」という量的問題の解決へ向けての第一歩を踏み出した。２００４年度にはいよいよ人づくりという問題が顕わになってくる。そして「ひとり立ちできるレンジャーが少ない」という質的問題の本質的な解決への道筋をつけてゆきたいと思う。そのためにもいくら進言しても歩み寄ることなく噛み合わなかった公社とレンジャーのコミュニケーションをどうとるかが最大のカギになってくる。これが今年もできないようなら、シビアなことを言うようだが本当にパークレンジャーという制度そのものの崩壊につながる危機すらあるという気がしている。

編集後記

この春から
色ぶい園地の工作舎で
ちょっとがんばってみようと思う
沈丁花の香る今日この頃
by さんちゃん

なんだか今年はあっという間の
1年でした。いつにも増して…
こうやって加速度がついていくの
だろうか…
流されず立ち止まり、確認しながら
余裕をもってすごしてみたいです。こんちゃん

年4回の発行でしたが、あっというまに
次号の原稿募集。いろいろな連載も増えて
楽しみです。なんとか来年度も続けていけたら
いいなあ、と思っています。原稿を書いてくれた
みなさん、ありがとうございました！ なかじい

IPWSとも長いおつきあいでした。この会報をとおして
皆さんをいろいろ知り、楽しかったです。編集作業も楽しい
ものでした。これからも長く続くように皆で頑張ってほしい
です。この一年はとても早かったように思います。お世話に
なりました。 すみの

書くことはむっかしい。
私も書いたが、書かせる方は楽と。
ツラヤマン

今年も色々挑戦したいと思います。ラッピー

2004.3.18.

新規 12期のレンジャーのみなさんへ

このInterpreter Workshopは、レンジャー自らが手作りしている会報誌です。各園地に分かれて活動していると、なかなかレンジャー同志も顔を合わせることが難しく、なんとか、情報を交換したり、共有したり、イベントの様子を報告できる紙面にしていきたいと考えています。記事の内容は、レンジャー活動に関するものが中心ですが、その他の連載記事や、「ひとりごと…」的なもの等も歓迎です。

いきなり原稿を依頼するかもしれませんが、その時は、快くお引き受け下さい。季刊なので次号は、6月発行予定です。

よろしくお願いします。

IPWS世話役 9期 なかじい

2004. 3. 18 発行